

太田玉茗賞

ふいごの風

金井節子

私の家はプレス屋だった
父は「けつとばし」といわれる
プレス機械に取り付けるぬき型作りの職人。
十センチ四方の鉄盤を
ハンマーを打ち、砕き
板鋸という鉄を切る鋸と
研磨機や金属鑢を使い
ひと月もふた月も鉄盤にさわる
製品のぬき型を作っていく
父は胸を張る
——これからが腕のみせどころよ
焼き入れは
出来上がった型を焔炉の中にすっぽり入れ
火力の強いコークスを山盛りにし
ふいごの風を焔炉の小窓めがけ送る
青光りの火柱をあげるコークス

火花は四方に爆ぜ
烈風はゴオーっと音たてて走り
風を呼べ コークスを盛れ 風をと
それドットコイ ドットコイ勢いづく父
あれよこれよいつも乗せられ
私も妹、弟もふいごを押す
押したり戻したり
木箱に質素な手押しの手棒がついた送風機
風は炎のあんばいも心得てくる
鉄の芯まで真っ赤に焼けただれた型は
一瞬水に潜らせまた焼き入れる数回
鉄はしなやかに頑丈な重力にも耐え
ひび割れも防ぐ
いのちが生まれる
やがて びわ色の灯りが染まる町並み
一日を働いたふいごは仕事場の隅に
優しい寝息をたてた
慎ましく生きるプレス職人の町
ふいごの風が町の灯りが消えないことを
私は願っていた

優秀賞

再びの風

三好 郁子

見えるだろうあなたには

あなたを語れる最後の老婆の葬列が

隣の町の産業がセメントで

素材となる良質の土が二神山(ふたがみやま)からとれた
村の中心のあなたの胸から腹からとれた

故郷(ふるさと)の村人は競ってあなたを売った

ダンプカーがあなたを辱め

丈は縮まり腹や尻から赤土の臓物が流れ出た

かわりに寒さに震えた板戸と藁屋根の家が

立派な光る瓦に煉瓦の洋館に

自動車走り家族喧嘩が始まった

二十年の間にあなたの首ははねられ

巨大な腹の穴には臭い風が吹く

ダンプカーはこなくなり村人は去り

残されたのは立派な瓦の下にちよこんと座る

赤いちゃんちゃんこの老婆たち

老婆はあなたを語った

春 竹の子が生え

名人は瀬戸のじい様で眼力で掘り当てた

夏 木陰は恋人たちの安らぎで

祖母は母を孕んだ

秋 深く入りこみ柴を集めた

弟も妹も山盛りにしよい山を下った

冬 なにもかも雪に覆われ熊も眠った

柴を焚く紫の煙が村をつつむ

村の最後の老婆が死んだ

もう誰もあなたを語れない 葬列が行く

——風が言う

新しい故郷(ふるさと)の物語はもう始まっていると

寺では太い眉の五代目が生まれ

崩れたあなたの腹に柔らかな若木が育ち

空を鳥が舞う

もうすぐ弟が帰ってきて牛を飼うという

心地よい風が吹く故郷(ふるさと)の村で

優秀賞

時の風

林 哲也

病室の窓を開けると
夕陽色の風が入った
生死をさまよう兄と
なす術のない私を吹き抜ける
兄の行方を司るものの声がささやく

この世に生を受け
源流に吹く風にドラマがあり
流れの終焉のドラマに
吹く風がある

最後の居酒屋で兄は亡き母を語った
母親の違う自分を弟妹四人と分け隔てなく
育ててくれ心から感謝していると
足掻いても拭えない鉛の錘
源流を知った十八歳の多感な胸裡を
どんな風が吹き荒れたのか

ひもじさに耐えた幼い日

六つ違う兄が通学の練習だと私を連れ出す

隅田川は煌めき夕陽色の風

「金色の龍みたいだ」

ポンポンと焼玉エンジンのだるま船が通る

龍は身をくねらせ踊る

「空襲で川にたくさんの人が浮いたんだ」

ぞくっと怖い風が吹いた

言った兄も歌を唄いだす

家族の揃うことが幸せな時代

酸素マスクがわずかに上下している

兄よ 聞いておきたい

胸に逆巻いただろ風の色を

呑みこんで吐き出さないままの

七十三年の喉元を見つめる

兄は歌を口ずさんでいるのだ

夕陽色の風のなかで

優秀賞

「きびしく甘い」

高森 美由紀

名久井岳(なくいだけ)から吹き降ろす風は
きりっと冷えたソーダ水の味

「風っこ吹げんば ひじゃかぶ痛める」

ばっちゃんが 膝をさする

ぼやきながら いそいそと

ワラでつなげた餅を 軒先に吊るす

「ギンガど しばれた風っこ 吹げえ」

餅の玉暖簾が風上から波のように揺れる

連峰の向こうから

のんのんとした暗雲をつれてきた風は

やっきになって 雪をたたきつけ

遮二無二 屋根を剥ごうとし

石をも凍らせ

ばっちゃんの目尻に溜まった涙も

癒えることのない ひびわれにも

あまねく 吹き込む

夜が更ける

猫背のばっちゃん こたつの足を握って

目を閉じ じっと風の言い分に耳を澄ます

四月

した した した・・・

軒から 金色の雫が滴り落ちる

風は すっかり気が抜けたソーダ水

雪を解かし

福寿草を目覚めさせ

ばっちゃんの傷を

ふんわりなでる

今年の冬あ さんびがった

寒ければ寒いほど 冷たければ冷たいほど

ばっちゃん 手を合わせる

何十年もそうしてきたこと

干し餅は ちょうど食べごろ

今年の 餅こは んめよお

優秀賞

山鳴り

高田 真

夜の底の
小さな扉をぬけて
会いにいく ふるさと
なだらかな山脈に囲まれた
盆地の過疎の村の

折り重なる谷の
木々が揺すれ
細い枝々は擦れ合い
やがて 森全体がざわめき
谷底がおおっと唸り
湧き立つ風を

山鳴りと呼んだ
土地に生まれたものは みな
その音を子守唄として育った

都会の暮らしに
息が詰まる日には
闇にまぎれて
こっそり 聴きにいく
その風の響きに
おおっと巻かれて
また 戻ってくる

優秀賞

ポプラの木たちを眺めていた

恵良 正巳

ポプラの木たちを眺めていた
彼らはきつと 百道の浜からの
潮風の匂いを嗅いでいるはずだ
あそこには 人間のぼくには得られない
のびのびと過ごせる世界があるんだと思う

酒臭い担任のSは
ぼくを教室の後ろに立たせていた
林間学校に 参加しないと届け出たからだ
自由参加のはずだった
月謝を滞納する家庭のぼくなのだ
新聞配達をしているのを知っているだろうに
家庭訪問はすませていた
出された濁酒(どぶろく)を愛想笑いをして呑んでいた
ぼくの膀胱には小便がたまっていた

ポプラの木たちが うらやましい

風を枝葉にうけて気持ちよさそうだ
生きることを心(しん)から楽しんでいるのだ
きつとそうだ

その場を動けずとも自由で幸福なのだ
はやく ここが終わって 過ぎ去って
夕刊を配りに行きたい
自転車を走らせ 風をうけて体を洗うのだ
Sのことなど忘れたい
学校のことなど無としたい

ぼくは
立たされたまま小便を漏らした
体育学校出のSが かなり立てる
百二十五センチのぼくの頭をはたく
校庭の隅に並ぶポプラの木たちは
人間の世界のことなど知らず
枝葉を風にゆらしている

佳作

ふるさとの風

比留間 美代子

遙かな記憶を小さな節穴から覗いてみれば
そこに見えるのは緑したたる竹林のそよぎ
家の右側の傾斜地には孟宗竹が繁茂し
葉擦れの音が絶え間なく
サラサラ サラサラ と
斜面の下には澄んだ沢水が流れ
沢蟹が横歩きしている

故郷を離れた幾十年月を遡れば
祖父を呼ぶ祖母の声 大地の匂い
児等を呼ぶ母の声 愛の風の漂う安らぎ
みんな遠くに過ぎていった夢語り
現世の掟のまま疾うに他界した親族

其処に住まう弟夫婦や息子達も
計理事務所へと出所し
昼間は誰もいない留守の家

それでも変ることなく竹林は鳴っている

人の暮らしがどのように変わろうと

そしらぬ顔して風はそよぐ

竹林のその先は雑木林へと続き

ザワザワ ザワザワ

雑木が小枝を交又させながら

語り合っている

その日の気流にまかせ

枝をくねらせて林は騒ぐ

無機の音に疲弊した神経を

そよろと解き放つ故郷の

緑の風の吹き渡る風景を眼裏に描く

仰ぐ空は澄み切り

思わず双手をあげて深呼吸をし

ゆっくりと想いを巡らす

故郷の風のなかへ

佳作

風

駒橋 きみ子

干し柿づくりの老婆が
空を見上げて
「この風がいい」と力強い声で
さけんでいる

その顔には苦労のあとを
深い皺が物語っている
空を見遣りながら
風のなかでもこの風が最上と
いいつづけている

風はその風味をもって
幸をもたらすものだ
その家の軒下には
たくさんの柿が下げられていて
初冬の風景にもたたずめる

風の恵みは老婆のくらしにも
係わってくるのであらう

間もなく干し柿となって
白い粉を付け店先に並ぶ日が
近い

佳作

アオスジアゲハ

戸田 和樹

アオスジアゲハが空高く
飛んでいる
楠の枝葉の
透き通るような青さの
真上辺り

激しく羽を打ち振るわすのは
生まれた日の
羽に零れた朝の滴を
思い出しているのか
初めて空をつかんだ日の風に
思いを寄せているのか

ぼくにも
遠い昔

無心に君を追いかけて遊んだ

日があった

アオスジアゲハよ
見上げる空の一点から
帰れない故郷の風を
思い出させてくれないか
白い夕モの中で
かすかに震えていたのは
確かに
幼い日に吹いた
夏色の風

佳作

私の風

大井 鞠

馬が走っていた
田が広がっていた
庭で山羊が啼いていた

雨が降った
どろんこの水たまりで
長靴をじゃぶじゃぶさせて叱られた

泥団子を作った
乾いたさらさらの土をまぶして
磨くと光った

道には草が生えていた
草を摘んで
おままごとの御数にした

乾いた土が

風に吹かれて
煙になった

土煙が
目に入って
痛かった

アスファルトの下に
土が閉じ込められる前は
土が共にあった

風は
土のおいがした

佳作

生きる理由

竹野 滴

あまり知られていないことだが
瓢箪山ぜんそくという名が語られた頃がある
葦原の重工業の風が生駒山にうちあたって
ふもとのまちに落ちるとい話だった
父の死因は瓢箪山ぜんそくでない

父はちいさな工場(こうば)を興し
わたしは与えられる暮らしたった
うたがいを知らず小学生になり
父は破産した
父の死因は瓢箪山ぜんそくでない

家は酒のにおいであふれ
わたしは暴力ということばをおぼえた
感情がみち
ことばにできなかつた
父の死因は瓢箪山ぜんそくでない

父は入院し退院し

酒を飲み

父と母は離婚した

わたしはまじめにおとなになった
父の死因は瓢箪山ぜんそくでない

最後に会ったのは二十歳のときで
父は清掃の仕事をしていた
父の1DKにはビートルズが流れ
やみに気づかせぬほど元気だった
父の死因は瓢箪山ぜんそくでない

墓へ参るとき父の工場の跡を通るが
それはだれかの工場だ
わたくしごとにすぎないが
こうして風にせきこむことがある
わたしの生きる理由は父だ

佳作

言葉の破片

小野 正和

びしびしと

重い足音がして

今年もまた故郷に

魔冬がやってきた

木の葉はこそぎ落とされ

草も花も息絶えた

獣も虫も穴に籠り

風が

怪獣のような声で

ひゅうひゅうと哭く

空気も凍りついた夕暮れ時

「どさ」(どちらえ?)

「ゆさ」(ちよっと湯浴みに)

「けりまらっせ」(帰りに寄ってらっしやい)

「そす」(そうしまししょうか)

村の共同浴場の湯に浸かり

凍った体を溶かして

一日の疲れを洗い流す

早く家に帰って

ゆっくり休みたいのだけれど

誘われたら断らないのが村の掟

「け」(おあがりなさい)

「く」(いただきます)

言葉は凍って

こなごなに千切れてしまったけれど

ばらばらになった言葉の破片の間を

吹き抜ける風は

ほのぼのと温かい

佳作

いのちのふるさと

野上夏美

真夜中の 耳が痛いくらい静かな病室
突然あらわれた目の前の命に戸惑う私
小さい命は 渾身の力をこめて声をあげる
その声をとりにまきはじめて不思議な風に
耳を澄ます

私にはふるさどがなかった
はじめまして さようならをくり返し
幼い頃から数えきれないくらいいろんな地を転々とした
いつも心の根はゆらゆらとさまよい
時には台風のような強い風に飛ばされ傷ついた

腕の中の小さな命が声を静め
はじめて目をひらく
戸惑いの色をうかべながらも
まっすぐ私をみつめる瞳
その瞳の中には
亡きおばあちゃん あなたの面影があった

そして 顔のあちこちにお父さん お母さん
幼い頃の微かな記憶の中にひそむひいおばあちゃん、
あなたもいた

ふるさとのない私ははじめて
腕の中の小さな命に
いくつものいのちのふるさとをみつけた
生まれてはじめて感じる心のやすらぎ

生まれたばかりの小さな足は
まだ立つことはできないけれど
いのちのふるさとが懸命に小さな足を支える
暗かった病室にはいつの間にか
明るい光がさしこむ

冷たい風にさまよう心の根には
今はあたたかい風が幾重にもとりまいていた

佳作

百日草ゆれて

井上 秀子

古い写真がありました
小学校に通い始めたある春の日
庭の古井戸の前で撮った 私と妹 同じ顔
母のお手製ワンピースは色違い
裾に風がそよぐその後ろで
母が植えた 百日草が揺れていました
私は生家が好きでした
平屋の狭い一軒家です
まるで原っぱのような広い庭は
モグラが掘った穴でデコボコでした
父の自慢の鉄棒で逆上がり
縁の下にはアリジゴク
やがてウスバカゲロウへ 美しい姿
トイレは汲み取りおぼけが出そう
外に並んだプロパンガスを

ずっとミサイルだと信じていました
大雪が降った年には
母が編んでくれたミトンをはめて
妹とふたり 双子が揃って大汗かいて
犬の雪像を作りました
その名も「ワンバー1号」翌年には「2号」

小学三年生になる春
このふるさとを離れました
淋しくて 淋しくて
父にせがみ昔の家を見に行きました
もう知らない人が住んでいて
軒下にたくさん鳥籠が吊るしてありました
小鳥がさえずるその先に
母の百日草がありました
変らずやさしく 風に揺れていました
私はそっと「ありがとう」と言いました
その風景も 今はひとつも残っていません
それでも生家の百日草は
時折 私の心を揺らします
いつもいつまでも 揺れ続けています

佳作

ふるさとの風

石川 厚志

とうさんには ふるさどがない
かあさんにも ふるさどはない
とうさんにも かあさんにも
ふるさとは もうないが
とうさんと かあさんは
ふたりでここに ふるさどをつくろう
だから ここが君らのふるさどだ

とうさんは ふるさどの
菜の花を描こう
かあさんは ふるさどの
ひぐらしのうたを歌うだろう
とうさんと かあさんが
ふるさとの焚き火に 火を灯すから
君らは ふるさとの雪で
雪だるまを つくってごらん

いのちを削り 君らの ふるさどをつくる
ふるさどに とうさんはいて
ふるさどに かあさんはいる
ふるさどに とうさんと
かあさんは お墓をつくり
そこに お墓があるのが 君らのふるさどだ
いつでもここへ 帰っておいで
ふるさどには とうさんと かあさんの
いつまでも あたたかな
いつまでも 君らを包む
やさしみの 風が吹いているよ

佳作

窓辺のそよ風

河内 さち子

あの頃のわたしはまだ若く
時代は戦後の乏しさの中にあつた
温和で書画をたしなむ父が
般若湯を呑んで暴れることもあつた
遮二無二父の懐に飛び込んでいったわたし
蚕さまに畑仕事 忙しさも手伝つてか
頭ごなしに声を張りあげる母
ちいさな胸は右に左にハラハラしたけれど
長女のわたしは受け止めねばならない
掃き掃除をしていた寒い朝だつた
ズドーン 僧堂の裏手の林の奥から
突然鋭い銃声が響いた
さっきまで甲高く鳴いていた
雉の音がぱったり途絶え
わたしの胸も激しく射抜かれていた
きのう見かけたあの番だろう
誰かが引き金を引いてしまった

雑巾を握りしめたまま

命の愛しさに泣けて仕方なかった

—お月さまお月さまどうかお守りください—
青白い月明かりの下でわたしは一心に祈つた
父と母の末永い安泰を穏やかな明け暮れを
そして傷つき絶えた鳥たちのために

鳥坂山から日は昇り日本海に赤い帯を引く

北蒲原の田園は日一日と稔りの色を増し

カナカナの鳴く夕暮れ時

ひとりぼつんと佇んでいた

父と母からもらつた紛れもない命の雫

なぜこうも疼くのだろう

涙に濡れた頬をそよ風が撫でていく

包みこむかのように

わたしの窓辺にそつと訪れた

そよ吹く風よ

市民奨励賞

櫛の風

高田 昭子

四十年前利根川を渡って来た
嫁入り先には沢山の木と裏山があった

夜眠れない

櫛の木がゴゴゴ鳴っている

生家で知っていた風と違う荒ぶる風

拳式は六月だったから

それほど強風ではなかったはず

夫は静かに眠っていた

裏山は真竹が生い茂り

少しの間にカラカラ軽い音をたてる

青田よりまっすぐ来る風は竹藪を通りぬけ

夏は自然のクーラー

「閉めて寝ないと寒い」と義母

遠くの山々から木枯が降りて

空っぽの田を駆けてくる

大櫛が唸り 庭中が叫び声をあげ

鴉は紙のようにペラペラし燃えがらのようだ

縁側の日溜背中丸めて針を運ぶ咲ばあちゃん

息子は五歳で死んだ

防風林の白櫛が風に鳴る

(太郎が会いに来た)

葉擦れは太郎がいるようで心が落ちつく

白櫛の風音に救われた

花びらの長い幣辛夷は

早春の風にふるえ 別れのハンカチのようだ

そよ風のようなうぐいすの声

風に乗ってきた包をたどると隣の沈丁花

散歩から戻った義父から桜の花びら

庭にはいつも風があつて

大櫛が幹まで揺れると

旅立った

咲ばあちゃん 太郎 お母さん お父さんの声がする

市民奨励賞

迎えにいくよ

金子 めぐみ

あなたの目が広い世界を見ていて
あなたの心が遠い憧れを追い続けて
そしてあなたが
大きな翼を広げて
ここから旅立っても
私はここで待ってるね
いつでも待っているからね

もしも霧が立ちこめて
目の前が見えなくなったなら
もしも翼が折れて
羽ばたけなくなったなら
いつでも帰っておいで

現実の厳しさに
心が凍り付いたら
電車に乗って

この駅に降りるんだよ
駅まで迎えにいくからね

母さんね
ずっとずっと
帰る場所が欲しかったの
だから
あなたに帰る場所を
いつでも帰ることが出来る場所を
つくることだけが
目標だった

この土地に決めたから
母さんは
いつでも待ってるよ
広い世界を見ておいで
どんなに傷ついても大丈夫だよ
母さんが
駅まで迎えに行くからね

市民奨励賞

風鈴

蓮見 直子

十六歳の夏 手紙と風鈴を残して
あなたはカナダに旅立ちました
やさしい風の吹く暑い日でした
空港での別れにちよっぴり涙ぐんだ私
あなたは知らないのでしょうかね
飛び切りの笑顔で手を振ったのですから

残された風鈴にあなたを想う
爽やかに頬をなでる風に心地良くなる音色
——元気に過ごしているのでしょうかね
あなたの鼻歌のようで私は自然に
目を閉じてその音色を楽しみます
風のない日は少し寂しくもあります
——ホームシックにかかっていますか？
強風 台風の日には風鈴を部屋に入れました
あなたが壊れてしまいそうだから…
——泣いているのかしらね

空はつながっているのです
きっとこの風も

カナダからたどり着いているのです
そしてきっとあなたにも

私の想いを乗せた
ふるさとの風が届いているはず
空はつながっているのですから…

雨 風に打たれて少し色あせた風鈴に
たくましくなったあなたを感じます

北風にも元気に答える風鈴(あなた)
——カナダに溶け込んできたのでしょうかね

くるくるとダンスをするように回る風鈴(あなた)
どんな風に吹かれ どんな音色を鳴らし
一年後 日本に戻って来るのでしょうか

——母は楽しみにしています